

『新古今和歌集』 版本の基礎的研究

国文学研究資料館蔵『新古今集』 版本およびマイクロ資料解題 (二)

坂 卷 理恵子

はじめに

新古今集の版本については、古くは松田武夫氏が『勅撰和歌集の研究』^(注1)において諸本に言及され、その後「新古今和歌集板本考」に代表される後藤重郎氏の一連の研究があげられる。^(注2)後藤氏は所収和歌の数の相違から諸本を三十六種に分類され、各々について詳細な報告をなされた。しかし『新古今集』の版本は単に歌数の増減にとどまることなく近世の出版の事情を視野に入れた見直しが必要な時期にある。そこで、先学の成果に導かれつつ、後藤氏が触れられなかった覆刻・同版・刷次といった問題をも併せて各々の成立について考えていきたいと思う。

前稿の解題(一)、『調査研究報告』第二六号(平成一八年三月)では、慶長年間の古活字開版から明治二十四年の白楽圃版までの近世における『新古今集』版行のおおまかな流れを示し、古活字版二種とそれに続く整

版の大本二十一代集版の成立について述べた。つづく本稿では館蔵版本及びマイクロ資料の版種の整理と分類を試み基礎報告とする。くわえて近世期に一番広く長く流通したと考える承応版について詳しくみてみたい。

(注1) 日本電報通信社 一九四四年一月、増補版(バルトス社一九八九年)は昭和一九九年刊の複製

(注2) ①『新古今和歌集板本考』名古屋大学文学部二十周年記念論集 一九六八年二月

②『新古今和歌集』板本考―玉の屋校正本』日本古典文学会報二二四号 一九九三年七月

③『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店 一九九九年三月)「新古今和歌集の版本」項

④『新古今和歌集研究』第三章 風間書房 二〇〇四年二月二日

一、『新古今集』版種一覽

まず前稿に訂正を加えた『新古今集』の版種一覽をあげる。版式より別版と判断できるものを、古活字版二種、整版十四種に分類した。修訂のあるもの、版元・刷次の異なる同版等は丸付き数字で記してある。ダッシュは蔵版目録のあるものに付けた。並びは概ね刷次を考慮したつもりだが、これについてはさらに詳細な調査が必要だと考えている。

【古活字版】

1. 甲種(十一行)

2. 乙種(十行)

【整版】

3. 大本二十一代集版

①無刊記

②明暦元年 八尾勘兵衛

③正保四年 吉田四郎右衛門尉

4. 小本二十一代集版

①無刊記

②無刊記(補版あり)

②無刊記(補版あり) 俵屋清兵衛歌書蔵版目録付

③無刊年(補版あり) 出雲寺和泉掾

5. 承応三年版

○承応甲午仲春吉旦とあるもの

①承応三年 松会市郎兵衛

②承応三年 中野太郎左衛門

③承応三年 版元なし

④無刊年 梅村弥右衛門

⑤無刊年 中川茂兵衛

⑥無刊年 伊丹屋茂兵衛

⑦無刊年 柏原屋与左衛門

⑦無刊年 柏原屋与左衛門 水玉堂蔵板和歌連俳書目付

⑧無刊年(別丁刊記) 天王寺屋一郎兵衛 水玉堂蔵板和歌連俳書目付

⑨無刊年(別丁刊記) 象牙屋治郎兵衛ほか五書肆

⑩無刊年(別丁刊記) (見返し/改正古仮名/文淵堂) 敦賀屋為七

⑪無刊年(別丁刊記) (見返し/改正古仮名/明玉堂) 岡本仙助(明治)

治)

⑫無刊年(別丁刊記) (見返し/改正古仮名/嵩山堂) 和漢書籍出版

所(明治)

⑬無刊年(別丁刊記) (見返し/改正古仮名/嵩山堂) 和漢書籍発売

所(明治)

6. 延宝二年版

7. 「延宝二年」文化元年補刻版(覆刻)

①文化元年 植村藤右衛門

- ①文化元年 植村藤右衛門 植村藤右衛門蔵板詩学書目録付
- ②文化元年 佐々木惣四郎ほか二書肆
- ③文化元年 佐々木惣四郎ほか二書肆 尚書堂蔵版書目付
8. 貞享二年版
 - ①無刊記
 - ②貞享二年 田中庄兵衛 中村孫兵衛
 - ③貞享二年 田中庄兵衛
 - ④〔無刊記〕刊記部分が刷られていない
9. 元禄二年版（系図絵入） 天王講会
10. 元禄九年版（系図絵入）
 - ①元禄九年 文拙堂
 - ②無刊年 文拙堂
11. 正徳三年版
 - ①正徳三年 柏屋四郎兵衛
 - ②無刊年 須原屋茂兵衛 勝村治右衛門
 - ③無刊記
12. 寛政六年版 植村錦山堂（特小本）
13. 寛政十一年版（菅原快晃執筆）
 - ①寛政十一年 前川六左衛門ほか二書肆
 - ②無刊年 岡田屋嘉七
 - ③無刊年 岡田屋嘉七ほか五書肆
 - ④〔寛政十一年発行〕文政五年補刻 山田佐助ほか二書肆

14. 嘉永五年版
15. 玉の屋校正本
16. 明治二十四年版 白楽圃江島伊兵衛（特小本）

なお『国書総目録』によれば、14. 嘉永五年版は内閣文庫蔵昌平坂学問所本一本があるのみ、資料館のマイクロ資料中にも見出せない。また、15. 玉の屋校正本は後藤氏の報告（注2の②）にある孤本で、未見のため氏の著述から推察するに両版は同版の可能性が高いことを付け加えておきたい。

二、館蔵版本及びマイクロ資料の整理と分類

これよりマイクロ／デジタル資料・和古書所蔵目録データベースにある『新古今集』刊本一五六件（二〇〇七年二月現在^{注3}）を対象に版種の整理と分類を試み基礎報告とする。

*印はデータベースに写本とあるが刊本（石澤一志氏のご教示による）、よってこれに加えた。

記述の様式は以下のとおり。

- ・前記『新古今集』版種一覧の順に該当するデータを▲で列挙する。該当するデータが資料館にない場合は「△所蔵なし」とした。
- ・資料館フィルム請求番号／紙焼写真請求番号、所蔵者名（略称）、冊数、備考（残欠状況等）を記す。
- ・4. の小本二十一代集版には料紙の大きさにより中本、小本二種があ

る。判別できるものはこれも記した。

版種一覧からもわかるように『新古今集』版本には無刊記、無刊年のものが多い。そのため『国書総目録』をみると同様で、今のデータベースの情報だけでは、版元がわかっても版種が確定できないし、どの版のいつ刷られたものなのかまるで見当がつかないのが現状である。

【古活字版】

1. 甲種（十一行）

△所蔵なし

2. 乙種（十行）

▲250-7-2 / C9398 九大支子 一冊（端本）

▲なし / C10176 東洋文庫 二冊

【整版】

3. 大本二十一代集版

①無刊記

▲ア2-28-12 / 13 国文研 二冊（二十一代集合刻本）

▲ア2-6-13 / 14 国文研 二冊（端本 八代集合刻本）

▲40-3-1 / C1747 三手泉亭 四冊

▲39-89-2 / C1972 三手今井似閑 四冊

▲99-390-1 土佐山内家宝資 二冊（端本）

▲コ1-21-1 後藤重郎 二冊（端本）

▲コ1-21-2 後藤重郎 四冊

▲225-110-2 バークレー三井 三冊

②明暦元年 八尾勘兵衛

▲ア2-11-13 / 16 国文研 四冊（二十一代集合刻本）

▲92-47-1 / 4 国文研懐風弄月（コ1-20-3 後藤重

郎） 四冊（補配本、第一冊～三冊は①の無刊記）

▲54-19-7 / 8 国文研松野 二冊（二十一代集合刻本）

▲304-54-1 / 8 (8) / C11285 福井市図 四冊

（二十一代集合刻本）

▲34-310-1 / C6838 神宮文庫 四冊

▲81-112-6 / 8 (3) / C8353 佐賀県図 四冊（八

代集合刻本）

▲304-52-1 / C11279 福井市図 四冊

▲55-308-2 / C8489 陽明文庫 四冊

▲55-304-1 / 8 (2) / C8483 陽明文庫 四冊（八

代集合刻本）

▲コ1-20-2 後藤重郎 四冊

▲55-301-2 / 8 (2) / C8481 陽明文庫 四冊（八

代集合刻本）

▲10-66-2-7〔7〕和歌山大紀州藩 四冊(二十一代集合刻本)

*▲73-347-1-8〔6〕/C9123 今治市河野美 四冊
(二十一代集合刻本)

③正保四年 吉田四郎右衛門尉

▲90-132-5〔1〕/C6302 宮城県伊達 四冊

▲281-67-1/C10688 盛岡公民 四冊

▲281-159-2/C11059 盛岡公民 四冊

▲55-447-1/C9457 陽明文庫 四冊

▲321-49-1-8〔4〕鎌田共濟郷博 四冊

▲コ1-19-4〔1〕後藤重郎 四冊

▲275-9-1-8 金城学院図 四冊

▲99-389-3 土佐山内宝資 四冊

▲306-1-1-8〔8〕宮城学院女大図 四冊(二十一代集合刻本)

刻本)

▲330-122-1-8 長野県短大図 四冊(二十一代集合刻本)

本)

▲257-489-5-8 大和文華 四冊(二十一代集合刻本)

▲98-123-1-8〔8〕岐阜大図 四冊(二十一代集合刻本)

▲ユ1-124-2 祐徳稻荷中川 四冊

4. 小本二十一代集版

①無刊記

▲ア2-12-8 国文研 小一冊(二十一代集合刻本)

▲219-11-2-8〔6〕/C8836 麗沢大田中 小一冊

(二十一代集合刻本)

▲281-79-1-7〔8〕/C10705 盛岡公民 小一冊

(二十一代集合刻本)

▲26-14-3-8〔2〕/C1166 酒田光丘 一冊(八代集合刻本)

集合刻本)

▲214-86-1-8〔5〕/C8815 西尾市岩瀬 一冊

(二十一代集合刻本)

▲222-79-1 三原図 中一冊(二十一代集合刻本)

▲マ6-18-1-8〔6〕益田家 小一冊(二十一代集合刻本)

▲324-165-2-8 新潟大佐野 中一冊(二十一代集合刻本)

本)

▲48-107-2-8〔2〕蓬左文庫 中一冊(八代集合刻本)

▲91-104-1-8〔2〕鹿兒島大玉里 小一冊(八代集合刻本)

本)

▲99-157-1-2〔6〕土佐山内宝資 中一冊(二十一代集合刻本)

合刻本)

▲55-309-2-8〔6〕/C8493 陽明文庫 中一冊

(二十一代集合刻本)

▲49-62-2-14〔7〕 岩国徴古 中一冊(二十一代集合刻本)

▲16-9-7 国文研松野(マ5-6-10-8〔2〕) 松野陽一 中一冊(八代集合刻本)

▲ア2-7-8 国文研 中一冊(二十一代集合刻本)

▲コ1-52-2-8〔7〕 後藤重郎 中一冊(二十一代集合刻本)

▲277-172-4-8〔6〕 園部町小出 中一冊(二十一代集合刻本)

▲37-81-2-8〔6〕 宣長記念 中一冊(二十一代集合刻本)

▲55-316-1-8〔6〕/C8494 陽明文庫 小一冊(二十一代集合刻本)

▲258-102-3 白杵図 中一冊(八代集合刻本か)

▲332-228-1-8 ノートルダム清心 中一冊(二十一代集合刻本)

▲81-120-7/C8363 佐賀県図 一冊

▲コ1-19-2 後藤重郎 中一冊

▲オ5-39-3 小保内道彦 小一冊

▲272-55-6 弘前図 中一冊

▲80-191-2 愛知教大図 中一冊

▲91-125-1-7〔7〕 鹿児島大玉里 中一冊(二十一代集合刻本)

▲229-43-5-5〔6〕 鶴岡市郷資 中一冊(二十一代集合)

刻本)

▲272-123-2 弘前図 中一冊

▲272-294-2 弘前図 中二冊(端本 八代集合刻本)

②無刊記(補版あり)

▲ハ3-10-1/C11901 初瀬川文庫 一冊(八代集合刻本)

▲コ1-19-3 後藤重郎 中二冊

▲88-100-1-2〔1〕 芸大図 中一冊(八代集合刻本)

▲88-98-5-8〔1〕 芸大図 中一冊(八代集合刻本)

②無刊記(補版あり) 俵屋清兵衛歌書蔵版目録付

▲222-81-5 三原図 小四冊

③無刊年(補版あり) 出雲寺和泉掾

▲12-244-1-2 国文研初雁 中二冊

5. 承応三年版

○承応甲午仲春吉旦とあるもの

△所蔵なし

①承応三年 松会市郎兵衛

- ▲225—110—1 パークレー三井 四冊
- ▲コ1—25—1 後藤重郎 二冊
- ▲コ1—24—3 後藤重郎 一冊(合冊)

②承応三年 中野太郎左衛門

- ▲コ1—25—3 後藤重郎 一冊
- ▲304—52—2/C11280 福井市図 四冊

③承応三年 版元なし

- ▲コ1—26—2 後藤重郎 四冊
- ▲コ1—26—3 後藤重郎 一冊(合一冊)
- ▲239—4—5/C9556 佐倉高鹿山 二冊
- ▲81—99—3/C8239 佐賀原図 四冊

④無刊年 梅村弥右衛門

- ▲10—94—2 和歌山大紀州藩 四冊
- ▲コ1—27—1 後藤重郎 四冊
- ▲コ1—26—4 後藤重郎 四冊
- ▲258—37—2/C9763 白杵図 四冊
- ▲222—89—1/C12025 三原図 四冊
- ▲253—9—2/C9885 岐阜市図 三冊(一、二合冊)

⑤無刊年 中川茂兵衛

- ▲89—171—8 名古屋鶴舞図 四冊
- ▲コ1—26—1 後藤重郎 二冊

⑥無刊年 伊丹屋茂兵衛

- ▲73—302—3 今治市河野美 二冊
- ▲コ1—25—4 後藤重郎 二冊
- ▲コ1—25—2 後藤重郎 二冊

⑦無刊年 柏原屋与左衛門

- ▲タ2—247—1、2 国文研 二冊

⑦無刊年 柏原屋与左衛門 水玉堂蔵板和歌連俳書目付

- ▲コ1—27—4 後藤重郎 二冊

⑧無刊年(別丁刊記) 天王寺屋一郎兵衛 水玉堂蔵板和歌連俳書目付

- ▲コ1—27—3 後藤重郎 二冊
- ▲コ1—27—2 後藤重郎 二冊

⑨無刊年(別丁刊記) 象牙屋治郎兵衛ほか五書肆

- ▲コ1—28—1 後藤重郎 二冊

⑩無刊年(別丁刊記)(見返し/改正古仮名/文淵堂) 敦賀屋為七

▲コ1-28-2 後藤重郎 二冊

⑪無刊年(別丁刊記)(見返し/改正古仮名/明玉堂) 岡本仙助《明治》

▲コ1-28-3 後藤重郎 二冊

⑫無刊年(別丁刊記)(見返し/改正古仮名/嵩山堂) 和漢書籍出版所

《明治》

▲311-15-4 熊本大教育 二冊

⑬無刊年(別丁刊記)(見返し/改正古仮名/嵩山堂) 和漢書籍発売所

《明治》

▲コ1-28-4 後藤重郎 二冊

▲オ5-43-5 小保内道彦 一冊(上のみ)の端本、⑫か⑬)

6. 延宝二年版

▲99-169-5 土佐山内宝齋 三冊(端本 第三冊欠)

▲16-28 国文研松野 一冊(端本 第三・四合一冊)

7. 「延宝二年」文化元年補刻版(覆刻)

①文化元年 植村藤右衛門

▲コ1-24-2 後藤重郎 二冊

①文化元年 植村藤右衛門 植村藤右衛門蔵板詩字書目録付

▲12-247-1-2 国文研初雁 二冊

②文化元年 佐々木惣四郎ほか二書肆

▲304-53-1/C11282 福井市図 二冊

▲338-10-1/C12389 杵築図 二冊

②文化元年 佐々木惣四郎ほか二書肆 尚書堂蔵版書目付

▲272-55-7〔1〕 弘前図 二冊

8. 貞享二年版

①無刊記

▲コ1-22-3〔1〕 後藤重郎 二冊

▲12-245-1-2 国文研初雁 二冊(四冊本合綴)

▲51-194-4/C7784 阪市大森 一冊(合冊)

②貞享二年 田中庄兵衛 中村孫兵衛

▲34-310-2/C6841 神宮文庫 四冊

③貞享二年 田中庄兵衛

▲37-72-2 宣長記念 四冊

▲コ1-22-2 後藤重郎 四冊

▲281-159-1/C11058 盛岡公民 四冊

④〔無刊記〕刊記部分が刷られていない

▲219-119-6/C8845 麗次大田中 四冊

9. 元禄二年版(系図絵入) 天王講会

▲305-78-1/C10511 愛知県大図 一冊(四冊本合綴)

▲54-23 国文研松野 一冊(端本 第三冊)

10. 元禄九年版(系図絵入)

①元禄九年 文拓堂

▲コ1-23-2 後藤重郎 二冊

②無刊年 文拓堂

▲コ1-23-3 後藤重郎 一冊

▲73-303-1 今治市河野美 二冊

▲298-103-1/C12339 茨城県歴史 一冊(第一の

みの端本 ①か②)

11. 正徳三年版

①正徳三年 柏屋四郎兵衛

▲コ1-29-1 後藤重郎 四冊

②無刊年 須原屋茂兵衛 勝村治右衛門

△所蔵なし

③無刊記

▲73-302-4 今治市河野美 四冊

▲298-71-3 茨城県歴史 二冊

▲コ1-29-2 後藤重郎 四冊

▲コ1-29-3 後藤重郎 二冊

▲コ1-29-4 後藤重郎 二冊

▲コ1-30-1 後藤重郎 一冊(合冊)

▲なし/C10581 東洋文庫 一冊(合冊)

▲16-79-5 北海学園北駕 二冊

▲305-75-2/C10509 愛知県大図 二冊

▲244-35-3/C9326 大阪女大図 二冊(最終丁欠に

より刊記不明、刷面より推定無刊記)

12. 寛政六年版植村錦山堂(特小本)

▲12-219 国文研初雁 一冊

▲16-6 国文研松野 一冊

▲210-17-5-6 (2) 船橋図書館誌 一冊

13. 寛政十一年版(菅原快晃執筆)

① 寛政十一年 前川六左衛門ほか二書肆

▲タ2-259-1-2 国文研 二冊

▲260-92-2 都中央誌料 四冊

▲311-15-3 熊本大教育 一冊(端本 下一冊)

② 無刊年 岡田屋嘉七

▲281-158-3/C11057 盛岡公民 二冊

③ 無刊年 岡田屋嘉七ほか五書肆

▲281-153-2/C11048 盛岡公民 二冊

▲224-90-3/C10798 熊本大北岡 二冊

▲コ1-24-1 後藤重郎 二冊

▲16-56-3 北海学園北駕 二冊

④ 「寛政十一年発行」文政五年補刻 山田佐助ほか二書肆

▲208-116-2 青森県工藤 二冊

▲330-63-3/C12314 長野県短大図 二冊

▲コ1-23-4 後藤重郎 二冊

14. 嘉永五年版

△所蔵なし

15. 玉の屋校正本

△所蔵なし

16. 明治二十四年版 白楽圃江島伊兵衛(特小本)

▲コ1-18-1 (1) 後藤重郎 一冊(合冊)

▲208-116-3 青森県工藤 二冊

▲12-246-1-2 国文研初雁 二冊

(注3) このうちつぎの五点は未調査

① 26-402-4 酒田光丘 一冊(端本)

② 357-123-1-7 東大宗教 一冊(八代集合刻本)

③ ユ1-100-2-7 祐徳稲荷中川 一冊(八代集合刻本)

④ ユ1-103-1-2 祐徳稲荷中川 一冊(八代集合刻本)

⑤ 356-6-3 松翠文庫 一冊

三、承応版の特徴

このように一々に資料を整理していくと、おおまかではあるが近世期の『新古今集』の流通が体系化されてくる。諸本の残存状況もその版の流布

と無縁ではないだろう。そう考えながら前の版種一覧を振り返ってみると承応版に目がとまる。次に示すようにこれには承応三年（一六五四）から明治まで二百年以上の長きにわたって版元・刷次の異なる十三種の同版・補修版が確認でき、現存する伝本も非常に多いからである。

○「承応甲午仲春吉旦」とあるもの

- ① 承応三年仲夏吉辰 松会市郎兵衛
- ② 承応三年仲夏吉辰 中野太郎左衛門
- ③ 承応三年仲夏吉辰 版元なし
- ④ 無刊年 梅村弥右衛門
- ⑤ 無刊年 中川茂兵衛
- ⑥ 無刊年 伊丹屋茂兵衛
- ⑦ 無刊年 柏原屋与左衛門
- ⑧ 無刊年 柏原屋与左衛門 水玉堂蔵板和歌連俳書目付
- ⑨ 無刊年（別丁刊記） 天王寺屋一郎兵衛 水玉堂蔵板和歌連俳書目付
- ⑩ 無刊年（別丁刊記） 象牙屋治郎兵衛ほか五書肆
- ⑪ 無刊年（別丁刊記）（見返し／改正古仮名／文淵堂）敦賀屋為七
- ⑫ 無刊年（別丁刊記）（見返し／改正古仮名／明玉堂）岡本仙助（明治）
- ⑬ 無刊年（別丁刊記）（見返し／改正古仮名／嵩山堂）和漢書籍発兌所

〔明治〕

新古今集の流布版本としては今まで、八代集抄本・正保四年版本を二大代表本文とするのが定説であった。校訂本文であるが旧国歌大観も正保四年版本をもとにしている。しかし実際は承応版にはこれらと並ぶ勢いがあり、ともすればこれらよりも流通していたと考えられる。

承応版は二百年にわたる流通の過程で修補を重ねていくことになるので、はじめにその特徴の大体のところを記して展開を追っていききたい。

大本 四冊（または二冊）

仮名序 巻首におく 十二行

本文 每半葉八首一行書き 詞書・作者は小字 イ本注記あり

本文末丁に巻二十の最後二首と尾題「新古今和歌集全終」、刊



松會版（パークレー三井225／110／1）

記が一緒に刷られている。

真名序 巻末におく 十二行

最終行「(空格) 曆乙丑七春三月云尔」のみ別丁

歌数 一九七七首

(一) 承応三年仲春と仲夏

前の承応版の分類で、最初に「○承応甲午仲春吉旦とあるもの」と番号を付けずに載せたものがある。管見にはいつた中で刊年の記されているのは次の三つ、

① 承応三年仲夏吉辰 松会市郎兵衛

② 承応三年仲夏吉辰 中野太郎左衛門

③ 承応三年仲夏吉辰 版元なし

いずれも「承応三歳仲夏吉辰」とある。後藤氏はこれに三ヶ月先立つ、

承応甲午仲春吉旦／寺町誓願寺前／西村又左衛門新板

の刊記をもつ三冊本(一冊欠)の存在を報告されている。上野洋三氏も同刊記の『新古今集』大二冊の存在をあげておられる。^(注4)これはいったいどんな本なのだろうか。

調べていくうちこれとまったく同じ刊記をもつ『古今集』大本二冊があることがわかった。真名序末と同丁に子持ち梓木記中「承応甲午仲春吉旦／寺町誓願寺前／西村又左衛門新板」とある。一方前に示したように『新古今集』承応版の刊記は巻二十の末二首と尾題「新古今和歌集全終」と同丁に刷られているから、真名序末と同丁に刷られた『古今集』との綴じ違

えは考えられない。が、両者がまるで無関係とも思えない。というのは現存する承応版の中では早い時期に刷られたと考えられる松會版にすでに修補を疑わせる箇所があるからである。



松會版(パークレー三井225/110/1)

松會版は題簽に「新板 新古今和歌(哥)集 上(下)之一(二)」とあることから四冊仕立てで発行されたらしい。仮名序四丁と本文の巻第一から五までを第一冊、巻第六から十までを第二冊、巻第十一から十五までを第三冊、巻第十六から二十と真名序三丁を第四冊としている。版心は次のとおりである。

(仮名序) 新古今和歌集 序 一(〜四) *二丁め「集」の字なし

(本文) 新古今和歌集 卷一 (一) (三十五終)

新古今和歌集 卷二 (一) (廿九終)

新古今和歌集 卷三 (一) (廿九終)

新古今和歌集 卷四 (一) (三十六終)

(真名序) 新古今和歌集 序一ノ一 (二)

* 最終三丁めは「新古今和歌集 卷三」

三丁めには「空格」 曆乙丑毛春三月云尔」の一行のみが刷られているが、字体が明らかに前丁と異なっている。版心と併せてみてもこの丁は初版當時のものとは思われない。そう考えると先の『古今集』のように真名序の末と同丁に刊記が刷られていた可能性もでてくる。

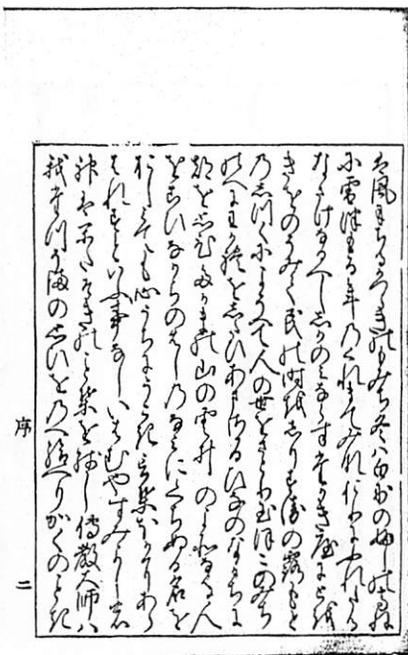
また現存の承応版では故意に改装した場合としては別として、初期に刷られたものの多くが仮名序↓本文(末に刊記)↓真名序の体裁をとっている。しかし刊記の位置には違和感があり、この配列には再考の余地がありそうである。実際、真名序の末葉が落ちた伝本は少なくないし、調べていくと「⑥無刊年 伊丹屋茂兵衛」版を境に体裁を変えて真名序↓仮名序↓本文の順で仕立て直されたことがわかる。

(二) 版木の摩耗

長い期間にわたって印刷が繰り返された承応版では、版木の痛みから何度か修補がなされたようである。仮名序の二丁めを例にとり、「③承応三年仲夏吉辰 版元なし」「④無刊年 梅村弥右衛門」「⑦無刊年 柏原屋与左衛門」の三版を比べてみたい。



承応三年仲夏吉辰 版元なし (後藤重郎 コ1/26/2)



梅村弥右衛門 (三原 222/89/1)

後者は尾題から「全終」を削り、「茂兵衛板行」をいかして前行に「大坂心齋橋筋伊丹屋」を埋め木した。本来なら「伊丹屋茂兵衛」とあるべきところ、版元の手間を少しでも省く仕業といえる。

(三) 正徳版との関係

承応版は大本二十一代集版から次の四首を欠いている。

巻第八

上東門院少将身まかりて後、つねにうちとけてかきかはしけるふみのものゝなかに侍けるを見いで、加賀少納言が許につかはしける
紫式部

817 誰が世にながらへてみむかきとめし跡は消せぬ形みなれども返し
加賀少納言

818 なき人を忍ぶることもいつ迄ぞけふのあはれはあすの我身を僧正明尊かくれて後久しくなりて、房などもいはくらにとりわたして、草おひしげりてことざまになりけるをみて
律師慶暹

819 なき人の跡をだにとてきてみればあらぬさとも成にける哉

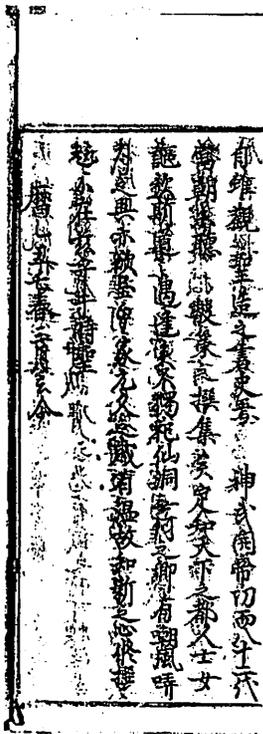
巻第十五

1403 うれしくは忘るゝ事も有なましつらきぞながき形見なりける
深養父

この四首が抜け落ちた理由はわからないが、諸版の和歌の異同をみると、同じように巻第八の三首を欠くものに唯一正徳三年(一七一三)版がある。^(注5) 承応版と正徳版のあいだにはほかに共通点がある。例えば、巻首に配された仮名序は十二行書きで二丁目以降は丁送りまで一致している。また本文は行数こそ異なるが字体が非常に似ている。さらに正徳版の真名序の末二行は次のように字配りが不自然である。

趣不在茲平干時聖〔空格〕

〔空格〕曆乙丑七春三月云尔



正徳版(今治市河野美 73/302/4)

これには前述した承応版の真名序の最終行が影響したものと推察できる。正徳版が承応版をもとに起こされたことは間違いないだろう。広義での覆刻と言ってもいいのかもしれない。承応版の流布の跡はこういった形でもうかがえる。

(注4) 『元禄和歌史の基礎構築』(付近世歌書刊行年表) 岩波書店 二〇〇三年

十月七日

(注5) 正徳版は巻十五 1403、さらに巻十六 1576 を欠き、総歌数は一九七六首。巻十五 1403 は寛政十一年版、(延宝二年刻) 文化元年補刻版、(寛政十一年刻) 文政五年補刻版も欠いている。

四、承応版の展開

以上三点気がついたところから承応版の特徴を書いてきた。それぞれを比べた結果わかってきた前後関係を整理したものが最後にのせる図である。二百年にわたる承応版の展開が少しみえてくるように思う。

これには(イ)尾題(ロ)刊記・別丁刊記(ハ)版心(ニ)見返し(ホ)蔵版書目の有無を記し、入れ木と思われる箇所は「」で括った。点線部分と矢印のない箇所は判断を迷うところである。今は保留とし原本にあたっての詳細な調査の機会を俟ちたい。また今後新しい種類の承応版が出てくる可能性も高いと考えている。

むすびにかえて

『新古今集』には『古今集』に先立って慶長元和年中につくられたとされる古活字版甲種が残っている。川瀬一馬氏『増補古活字版の研究』には、高木文庫蔵、安田文庫蔵零本、大東急記念文庫蔵の三本が報告されている

が、残念なことに資料館にはこの甲種のフィルムがない。その後、寛永頃につくられたのが整版の基になったと思われる古活字版乙種である。これは伝本も少なくなく、東洋文庫蔵本がマイクロ資料にある。丹念に調べていくと、九州大学の支子文庫蔵の一冊は『国書総目録』に不載の『新古今集』古活字版乙種の端本とわかった。

また延宝二年版は、文化元年版の刊記に「延宝二甲寅年暮春吉日／文化紀元秋九月補刻」とあることにより古くからその存在が知られていた。後藤重郎氏も「文化元年補刻板によりその存在が知られる」とだけ書かれていて、当時延宝二年版はみておられなかったようだ。資料館には延宝版のデータが二点あり、これらを比較することによって文化元年版は補刻とあるも実際は精巧な複製であることが確認できる。延宝二年(一六七四)から文化元年(一八〇四)まで百三十年もの月日が流れているのである。ただ館蔵の資料はいずれも完本ではないので、さらには延宝二年版として唯一『国書総目録』に載る矢野玄道文庫蔵本にあたってみる必要がある。古典籍を簡単に手にとれなくなった昨今、資料館が行っている網羅的な調査・収集という事業はこのように大きな意味を持っている。「原本にあたる」という学問の鉄則を踏まえつつ、これらをどのように活用して研究の幅を広げていくかが今後の課題である。

【付記】

資料の利用にあたり原所蔵の各位、諸機関に心より感謝申し上げます。

なお本稿は科学研究費補助金(基盤研究(B))による研究成果の一部である。

